

# ICT業界、一般企業で これから求められる人材

今や世界的な成長産業であり、その分変化も激しいICT業界では、どのような適性やスキルをもった人がこれから求められていくのでしょうか。また、ICTの進化により変化を迫られている一般企業では、どんな人材が活躍できるのでしょうか。

取材文／荒尾貴正（本誌編集デスク）

## ICT業界

### 「ICTに興味あり」 それが大前提

日本を代表するICT企業から呼びがかかり、「うちは覇気のない社員が多い。この業界への興味を喚起するような研修をしていただきたい」。そのようなお願いをされることがあると、前出の矢澤氏は語る。

「驚くべきことだし、正直言って、非常にまずいことだと思いますね。ICT業界は人気があるし、給料のいい会社も多いので、ICTに興味のない人が入ってくるケースがあるんです。企業はそれを望んでいませんし、本人にとっても

決して良くない。かつてこの業界に『30歳定年説』がありました。それは体力の限界ではなく、もともと好きじゃない人がついていけないだけの話だと思います。人は悪気なく自分を偽れますから、高校生たちには『自分にウソをつかないで』と言いたいですね」

興味があるかどうかのパロメーターのひとつは、言葉に興味があるかどうか。矢澤氏は社員研修で略語の意味を問うという。IBM、CPU、USB：…だけでなく正解できるかで、それがわかる。「本当に興味があるのなら、まずは言葉に興味があるはずですよ。だから高校の先生方も、生徒が〇〇業界に行きたいと言ったら、その業界の用語を尋ねるといいでしょう。あまり答えられなかつたら、たぶん興味がないのでしょね」

### 変化を楽しめる 好奇心旺盛な人

ICT業界には「普通の人」はあまり向かないのではないかと、コロプラの馬場氏は語る。

「遊びたいとか、ラクをしたいと常に思っているのが『普通の人』だとすれば、この業界はそうではない人が向いていると思います。何かおもしろいことを実現してやろう、世界を変えてやろう、といった気持ちをもつ人のほうが合っていますね。流行の業界だからとか、手に職をつけたいといった理由で来ても幸福になれないでしょう」

キーワードは「好奇心」だ。「すごいスピードで変化する業界ですから、変化が『しんどい』ではなく、『おもしろい』と感じられるくらい好奇心旺盛な人が合っています」



株式会社コロプラ代表取締役 馬場功淳氏

### 無理してでも進学し 情報工学を学びたい

この業界は日々めまぐるしく変化するが、技術の移り変わりが速いように映るが、技術の根本は不変だという。「インターネット産業が立ち上がった20

一般企業

ICT利活用能力  
問われる社会

仕事でメールやインターネットを使うことは当たり前になったが、真に使いこなせている人はまだ多くない。インターネットから必要な情報を探し出し、プロジェクトのメンバーとネットを介して情報共有やコミュニケーションをしたり、データを分析・活用するような力をトータルで「ICT利活用能力」と総務省は呼んでいるが、業務の中でそうした力を問われる場面が日に日に

年あまり経ちますが、『プロトコル』という通信の約束事は当初から何も変わっていない。その上に技術がどんどん積み重ねられているのが現状です。だから根本を学んでおくことはとても有効で、その知識は生涯使える可能性があります。大学などで情報工学の基礎をみっちり学べばそうした知識が身につきますか

新卒で年収1000万円  
もあり得る世界

ら、この世界に入りたいのなら少々無理をしても進学し、学ぶことを私は強くおすすめしたいですね(馬場氏)

ICT業界の採用がほかの業界と少

増えているというのが、ほとんどの社会人の実感だろう。文書ソフトや表計算ソフトを使えるようになることに加え、学生時代からこうした力を身につけておけば、社会に出た時にアドバンテージとなる。iPadやiPhoneを導入するような学校にはそういう意図があり、またそれ以外の学校でも、ICT利活用力の育成を目指すところは増えている。

ケータイより  
パソコンが使えるように

ICTをうまく活用できるかどうかで企業の業績にも差がつく。例えば

し違うのは、高校新卒、大学新卒であっても「実績」が評価されるということだ。自分で作ったゲームやシステムを見せ、本人の技術力が評価されれば、最初から「年収1000万円」で雇う企業も現実にある。

しかし、考えてみればそれは驚くに当たらない。ICT企業は若者が創業

ソーシャルメディアを使えば、知人から知人へと口コミで情報が広がり、単純な広告よりも有効なプロモーションが実現することもある。米国では企業の約8割が宣伝やマーケティングにフェイブックを利用しているといわれるが、そのような企業は、日本ではごく一部だ。

することが多く、マイクロソフトやフェイブックの創業者のみならず、20代の億万長者も決して珍しくない。

「今はパソコン1台あれば、さまざまなソフトが作れるし、あらゆるチャンスが開けます。だからこの世界に興味があるなら、まずは作り始めてみるのがいいでしょう」(馬場氏)

「日本企業の多くがそういうメディアの有効性に気づいておらず、ユーザーである若者のほうが使い方を心得ています。若者にそのことに気づいてもらい、企業に入って自分の考えやセンスでその企業のやり方を変えていくような存在になつてもらいたいですね。そうした人物を育てる教育を大学で行っていく

たいと考えています」(木暮氏)

とはいえ、木暮氏がひとつ問題だと思っているのは、日本の若者の「ケータイ依存」だ。「日本の携帯サービスが便利すぎる」ことが、もしかしたら「負の遺産」になりかねないと危惧しています。世界の若者はパソコンが主流です。インターネットの最大のメリットはやはり世界中の情報にアクセスできること。世界の主要大学は授業をネットで公開していますから、お金がなくても最高の教育を受けられます。日本には携帯電話で器用にレポートを書く学生がいますが、それでは先が思いやられる。ぜひ高校時代からパソコンに使い慣れていたいただきたいですね」